

ルカの福音書 第22章 44節

「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」

ベランダにある薔薇が再び咲き始める。今年は多くの蕾が見える。ひとつひとつの蕾が順序よく咲くのが楽しみだ。雨の日、風の日、嵐の日、晴天の日、一日たりとも同じでない環境を通りながら咲く日をめざす蕾がたくさん目にとまっている。一輪だけ赤赤と咲いた。本来なら、ピロウードのように深い紅の美しさに見とれるはずである。しかし、今はなぜか痛々しく見えてしまう。東欧で流される血が重なって見えてしまう。いのちが破壊され、嘆きに溢れる地で流される血のようで薔薇の紅が魂に突き刺さるようだ。

咲くときを待ち焦がれ、たくさんの蕾をつけ、ようやく咲き始める美しい花を悲痛な思いで見なくてはならない世の矛盾にただ落胆するばかりである。このむごい世のためにゲッツセマネで苦しみもだえ、汗が血のしずくのように地に落ち、祈られたお方がいる。そして、その園から立ち上がり、ゴルゴタの丘でご自身のからだを裂き、血潮を流してくださったお方がいる。

だから、いつの日か野に咲く花を手放して喜び、咲かすお方の御名を讃え、喜ぶときがくることを確信する。地上の叫び、痛み、涙が喜びと感謝の歌で満ちる日が必ず来ることを待望しつつ。

2022年4月20日